

「こうでなければ人の命は守れない..」

23年10月26日(水)付けの読売新聞「編集手帳」です。小学生の登校風景、高圧的に横断歩道を渡らせる警官役の姿に、本職の警察官が「作り物ではない警察官の、日常の優しさだ。こうでなければ人の命は守れない」と、感心したことが書かれています。

本物の役者、本物の演技に感心した..、というところですが、私は、それ以上に「物でも扱うように高圧的に移動させる」警察官に、“**本物の職業人**”の姿を見たような気がします。ややもすると、「いつもニコニコ優しいお巡りさん」のイメージが先行しますが、本物の職務には、相当の厳しさが求められているのでしょう。結果的に人の命を守ることができなければ、警察官として失格なのでしょうから。

さて、私たちは、本物の職業人として、どうあるべきか..。 本物の教師のあるべき姿とは..。



大滝 秀治 (おおたきひでじ)
1925年(大正14年)6月6日生
東京都出身。劇団民藝所属。
奈良岡朋子と共に劇団代表。
個性派俳優として評価が高い。

編集手帳

テレビドラマで巡査役の大滝秀治さん(86)が登校児童に横断歩道を渡らせた。俳優は十人が十人、そういう場面では子供たちを優しく誘導する。大滝さんはまるで物でも扱うように高圧的に移動させた◆ドラマを見た本職の警察官が感心したと、脚本家の倉本聰さんが自著に書いていた。警察官いわく、「作り物ではない警察官の、日常の優しさだ。こうでなければ人の命は守れない」と◆その人が現れるや、画面に陰鬱が刻まれる。比類のない存在感、精魂込めた役づくりの賜物だろう。

大滝さんが今年の文化功労者に選ばれた◆「こんな顔で、こんな声でしょ。若い頃から電車で女学生の前にうっかり立ちうものなら、席を譲られて、ボクはたいへん不名誉だね、屈辱感を味わいまして..」。あるインタビューで回想している。その顔が、その声がいまは、舞台、映画の観客やテレビの視聴者を物語の世界に引き込み、魅了してやまない◆「君は俳優に向かない。やめると決心するのも才能だ」。昔、所属する劇団民芸の重鎮でもあった名優、滝沢修から転職を勧められたという。人生とは分からないものである。

2011.10.26

